

3月31日受難節第5主日礼拝「弱さを身にまとう」阪口新牧師

聖書箇所 ヘブライ書 5:1～10 ルカ福音書 20:9～19

先日イチロー選手の引退会見を見て、ボロボロと大泣きしてしまいました。私は野球部に所属していて、イチローモデルのグローブを使うほど好きな選手だったんです。色々と素敵な言葉を語っておられましたが、会見の一番最後の言葉が印象的でした。「アメリカに来て、メジャーリーグに来て、外国人になったことで人の心を慮ったり、人の痛みを想像したり、今までなかった自分が現れたんですよね。この体験というのは、本を読んだり、情報を取ることができたとしても、体験しないと自分の中からは生まれないので。孤独を感じて苦しんだこと、多々ありました。ありましたけど、その体験は未来の自分にとって大きな支えになるんだろうと今は思います。」あの、偉大なイチロー選手が孤独に苦しんだことつまり弱さを負ったことが良かった、そのおかげで他者を思い遣ったり、人の痛みを想像できる、つまり他者に共感できる人間へと成長させてくれたというのです。

今日一緒に聞きましたヘブライ書にはこうありました。「大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。」ヘブライ書というのは少し変わっていて、イエス様の祭司としての側面を語ります。祭司というのは、人々と神さまとの間に仲介者として入って、罪の赦しのために供え物や祈りを献げる役割を負う人です。特にその頭である大祭司は一年に一回、神殿の一番奥の最も神聖な場所に入り、イスラエル民族全体の一年の罪の赦しを願い、供え物を献げます。ヘブライ書は最後にして最大の大祭司がキリストであり、ご自身を究極の供え物として奉げて私たちの罪を赦して下さったとしています。「ヘブライ書 9:11～12 キリストは、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

今日の聖書ではこのキリストが神の身分にありながら、苦難を受けご自身も弱さを身にまといわたれたからこそ、迷ったり、悩んだり弱さを抱えた私たち人間のことを思い遣ることが出来るというのです。そうなんです。私たちが信じる救世主イエス・キリストは弱い、それもめちゃくちゃ弱いと言われているのです。なぜならあえて弱さを追われる方だからです。十字架につけられ、苦しみの中に殺されたのです。私たちは救世主という時、例えば窮地に颯爽と現れ、凄い力で難問を解決したりする人をイメージします。でも聖書は全然違う救世主像を語るのです。十字架につけられ殺されたみじめな男、そ

んな者が救世主だと！それが、聖書が語る神秘的なのです。

私たちにとって弱さとは何でしょう？私たちは皆、何か弱さを抱えていると思います。先日まで行っていたスプリングキャンプで中学生たちともそのような話になり、自分の弱いところを聞いてみました。ある子はネガティブなところとか、性格が暗いところとか、恥ずかしがりやで人とうまくコミュニケーションが取れないこと、などいろいろ出ました。彼らにとってそれは自分の嫌いな部分（コンプレックス）で、何とか克服したいものでした。皆さんにとっても弱さとはそういうものではないでしょうか？

ところで、シルヴァスタインという人の書いた「ぼくを探しに」という本があります。円に欠けた部分がある「僕」が完全な○になるために、ピッタリはまるピースを探しにゴロゴロ転がって旅に出かけるのです。欠けているので、スムーズには進めません。ゆっくりゆっくり、穴にはまったり、躓いたりしながら進みます。雨の日も風の日も楽しんで進みます。途中で色んな破片を見つけては試しますがうまくはまるものはなかなか見つかりません。ところがある日、ついに自分の欠けた部分にぴったり合うかけらが見つかりました。僕は大喜びでそのかけらをはめて、勢いよく転がり始めました。最初は勢いよく進むので楽しいです。どんどん転がります。ところが、だんだん、旅は単調でつまらないものになりました。勢いよく進むので景色を楽しむ時間も、虫とおしゃべりする時間ありません。ただただ通り過ぎていくだけなのです。僕は単調な旅に耐えきれなくなって、ついにぴったりはまったパーツを手放すことにします。そしてまた、新しい僕を探しに出かけるのです。

この物語はこんなことを教えてくれます。実は僕にとって本当に必要な部分は欠けだったのです。ずっと僕は欠けていない完ぺきな自分が僕だと思い込んでいたけれども、実は欠けている部分が誰かとおしゃべりする余裕であり、景色を楽しむ心であり、個性だったのです。欠け（弱さ）が自分自身を形作る最も大切なものだったのです。「弱くても良いんだよ」とか言うレベルではなくて、「弱さ」が私たちにとって一番大事な部分だったのです！ところが、どうでしょう？私たちは時に他者と自分を比べ、自分にはないものを求めてもがきます。自身の「弱さ」をなかなか受け入れることが出来ません。神さまは私たち人間を作られた時に「きわめて良かった」と言われたのに、神さまが認めてくださった私たちを、私たち自身が認めることが出来ないのです。私たち人間の歴史はそうやって自分たちの弱さを認めず、神さまに与えられたものに満足せず、ないものねだりをし続けてきた歴史なのかもしれません。

今日はもう一箇所、ルカによる福音書からたとえ話を聞きました。イエス様は人々にこんな譬えを話されました。ある人がぶどう畑を作りました。垣を巡らせ、絞り場を掘り、見張りのやぐらを建て、すっかり準備を整えてから、それを農夫たちに貸し出し、旅に出ました。なぜせつかく作ったぶどう畑を人に預けて出かけてしまうのか・・・イエス様の時代、大きな畑を持てるような地主は都会に住み、畑の管理は地元の農夫たちに任せたようなのです。さて、収穫の時期になったので持ち主は、使いの者をやって、収穫を納めさせようと思いました。ところが、ここで問題が起きます。農夫たちは欲望に目がくらみ、畑の収穫を奪おうとしたのです。使いを袋叩きにして追い返します。そして次々に送られてくる使いを同じようにして傷を負わせて送り返します。さあ、困ってしまった主人は考えました。「**どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう**」結局、主人の願いは叶いませんでした。農夫たちは跡取り息子をぶどう園の外に放り出して、殺してしまうのです。そうやって相続財産を奪い、自分たちのものにしようと考えたのです。これはたとえ話ですが、全くの架空の話ではありません。当時、このように農夫たちが主人へ反乱を起こして、農場を奪おうとすることは、実際に起きた出来事だと言われています。

ここで農園の主人は神さまを、そして農夫たちはイスラエルの民族の指導者たち、つまり王や祭司などを指していると言われます。そしてぶどう畑はイスラエルの民です。神さまはイスラエルの人達を一生懸命手入れして、良く育つようぶどう畑に植えられました。それを託されたのは指導者たちです。けれども、彼らはぶどう園の主人の意に沿うようにぶどうを収穫しませんでした。欲望のままに奪おうとしたのです。神さまは彼らを正すために何度も預言者たち（つまり使いの者）を送ります。それにもかかわらず、指導者たちは悔い改めません。ついに神さまはご自身の独り子イエス様を送ることを決意されたのです。イエス様なら受け入れてくれると望みを託して・・・結果は皆さんもご存知の通り、人々はイエス様を十字架につけて殺してしまうのです。この譬えを聞いた律法学者や祭司長たちは自分たちへの当てつけだと受け取り、怒りに燃えたのです。

ところで、この譬えを単に指導者たちへの当てつけだと聞くなら、私たちにはあまり意味がありません。けれども、イエス様はこれを民衆に向かって語られたのですから、私たちへのメッセージも込められていると考えられるのではないかと思います。実は私たちは神さまから最高のぶどう園を用意してもらっています。つまり多くの恵みを与えられて、そこでたくさんの収穫を得るように招かれています。そしてもし多くの収穫を

得たのならば、それを神さまにお返しし、もっと大きな恵みとして他者と分け合うことが求められているのです。ところが私たちの実際はどうでしょうか？私たちは与えられている恵みの大きさよりもむしろ自分たちに欠けた部分に目が行くのです。弱さを覆い隠したくなります。そしてその部分を奪い取ることで補おうとするのです。それこそ私たちの罪の一つの表れです。そうやって私たちの罪がイエス様を十字架にかけたのです。

けれどもイエス様の話はたとえだけでは終わりません。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」と詩編の言葉を語られます。家大工が小さくて使いものにならないと捨ててしまった石ころが、新しい家を建てる中心の石(隅の親石)になります。それが神の不思議で神秘です。同じように私たちが必要ないと切り捨てた弱さをイエス様は拾って私たちの救いとして中心に据えて下さるのです。キリストが負って下さった弱さが私たちを救うのです。

聖書は本当に不思議なことを語ります。十字架につけられ、みじめに殺されたあのイエスが神からの救い主だったと。普通に考えてそんなことありえません。ところが聖書はそうだと言うのです。それはイエスの十字架での死が、みじめな死が、弟子たちの弱さを包み込むものだったからかもしれません。ルカ福音書には十字架にかけられて死ぬ間際に神に祈るイエスを見て、百人隊長がこう叫んだと書かれています。「本当にこの人は正しい人だった！」

なんだか教会にあっても、この世的な力、たとえば人数が多いこととか、地位が高いこととか、賢いこと、とかそんなことがもてはやされることがあります。牧師の間でも出世コースという言葉もあったりします。私たちにとって弱さを身にまとうことは決して簡単ではありません。でも、このレントの時期にキリストは私たちのために弱さを負われたことを覚えたいと思います。そして私たちももう一度自分たちの弱さに向きあいたいと思います。確かに弱い私たち、けれどもそんな私たちを贖い、弱さを力に変えてくださるイエス様を見上げながら歩みたいと願うのです。最後に、パウロを力づけた神さまの言葉を聴きましょう。「Ⅱコリント 12:9 主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」